

CONTENTS

特集 非侵襲的呼吸管理：
NPPV vs. HFNC 論争 いま決着のとき

責任編集 永田 一真, 横山 俊樹, 櫻谷 正明

- 1 NPPV と HFNC は何が異なるのか? 447
RENOVATE trial の知見をもとに、急性呼吸不全に対する使い分けを整理する
櫻谷 正明 JA 広島総合病院 救急・集中治療科
- 各病態における NPPV と HFNC のエビデンス, 使い分け
- 2 COPD 増悪 457
各医療機関の社会背景や習熟度もだいじ
西村 直樹 国立健康危機管理研究機構 国立国際医療センター 呼吸器内科
- 3 うっ血性心不全 465
NPPV が適応, HFNC が代替手段となる場合
坂口 輝洋 公立陶生病院 循環器内科
- 4 急性低酸素性呼吸不全 (AHRF) 475
HFNC も NPPV も選択肢の 1 つ, P-SILI 予防, 気管挿管への適切な移行も忘れない
岡森 慧 済生会宇都宮病院 呼吸器内科
- 【コラム】免疫不全患者 484
免疫不全における急性呼吸不全を別個に扱う必要があるのか?
内藤 恵仁 公立陶生病院 救急部集中治療室/岐阜大学医学部附属病院 高度救命救急センター
横山 俊樹 公立陶生病院 救急部集中治療室/呼吸器・アレルギー疾患内科
- 5 抜管後の非侵襲的呼吸管理 489
再挿管リスクを抱えた患者には NPPV や HFNC を使用すべき
前澤 俊憲 JA 広島総合病院 救急・集中治療科
- 【コラム】急性呼吸不全診療における睡眠関連呼吸障害の評価の重要性 498
まず疑い急性期を乗り切り, 次の診断・治療が予後改善につながる
村瀬 公彦 京都大学大学院医学研究科 呼吸不全先進医療講座
- 特殊病態における NPPV と HFNC の使い分け
- 6 間質性肺炎急性増悪 503
使用実態とエビデンス, 当院の実際
寺町 涼 公立陶生病院 呼吸器・アレルギー疾患内科/救急部集中治療室
- 7 気管支喘息急性増悪における非侵襲的呼吸管理 509
エビデンスと実践の乖離を俯瞰する
新井 健史 公立陶生病院 救急部集中治療室
横山 俊樹
- 【コラム】終末期における NPPV/HFNC 516
緩和ケアの視点から適応を考える
三好 祐輔 神戸市立医療センター中央市民病院 緩和ケア内科
- 8 NPPV と HFNC の離脱方法 521
離脱基準と方法のエビデンスと実際, 長期使用へのタイミング
貴志 亮太 日本赤十字社大阪赤十字病院 救急科
永田 一真 神戸市立医療センター中央市民病院 呼吸器内科
- 【コラム】NPPV, HFNC のインターフェイス 534
その効果を最大限発揮するための適切な選択と正しい装着法
石橋 一馬 神戸市立医療センター中央市民病院 臨床工学技術部

【コラム】ICU 人工呼吸器による NPPV はあり？ なし？ 542

NIV モードのメリット・デメリット、専用機との違い

開 正宏 日本赤十字社愛知医療センター名古屋第一病院 臨床工学科

⑨ NPPV, HFNC 中の忍容性不良にどう対処するか？ 545

その要因を見極め、まず非薬物的介入、鎮痛鎮静薬投与は最終手段

伊藤 次郎 神戸市立医療センター中央市民病院 麻酔科 集中治療部

【コラム】本当に NPPV 管理中に鎮静薬を使ってよいのだろうか？ 554

現時点でルーチンに使用すべきでない

小林 絵梨 済生会宇都宮病院 救急・集中治療科

山本 良平 福島県立医科大学 臨床研究イノベーションセンター

⑩ NPPV, HFNC 中のモニタリング 559

次世代の呼吸管理と遅延挿管の回避

岡野 弘 聖路加国際病院 集中治療科

【座談会】NPPV/HFNC ケアの看護師、PT、CE の目のつけどころ 568

永田 一真

横山 俊樹

櫻谷 正明

連載

◆ え？知らないの？ 酸素ボンベの使い方 586

〈シリーズ構成：上岡 晃一 東京医科大学病院 臨床工学科〉

森下 世紀 福岡徳洲会病院 臨床工学科

◆ 集中治療に関する最新厳選 20 論文 598

田邊 翔太 松江赤十字病院 救急部

吉田 英樹 聖マリアンナ医科大学 救急医学

特別掲載

◆ 他科多職種連携の極意とホンネ 第 2 回

③個人レベルの処方箋：他科コンサルトでの「戸惑い」「憂鬱」を減らすには 592

東 秀律 日本赤十字社大阪赤十字病院 救急科

④組織レベルの処方箋：院内の患者たらい回しを避け、気持ちよく引き継ぐには 595

大矢 あいみ 横浜南共済病院 救急科

◆ 倫理規定 606

◆ 次号予告 607

注意 本誌に携わった全員が、本誌に示す情報が正確で、実臨床を反映したものとなるよう極力努力した。しかしながら、編著者ならびに出版社は、本誌の情報を生じたいかなる不都合に対しても責任を負うものではない。薬物の使用にあたっては、個々の薬物の添付文書を参照し、適応、用量、付加された注意・警告に関する変化を常に確認されたい。